

今週の為替相場見通し(2024年11月5日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		151.80 ~ 153.88	153.00	150.00 ~ 158.00
ユーロ	(ドル)		1.0769 ~ 1.0905	1.0833	1.0750 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		164.79 ~ 166.65	165.63	162.00 ~ 168.00
英ポンド	(ドル)		1.2845 ~ 1.3043	1.2921	1.2800 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	195.38 ~ 199.81	197.68	194.00 ~ 200.00
豪ドル	(ドル)		0.6537 ~ 0.6625	0.6560	0.6450 ~ 0.6650
(1豪ドル=)	(円)	*	99.54 ~ 101.53	100.35	99.00 ~ 102.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 范 哲遠

(1) 今週の予想レンジ: 150.00 ~ 158.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

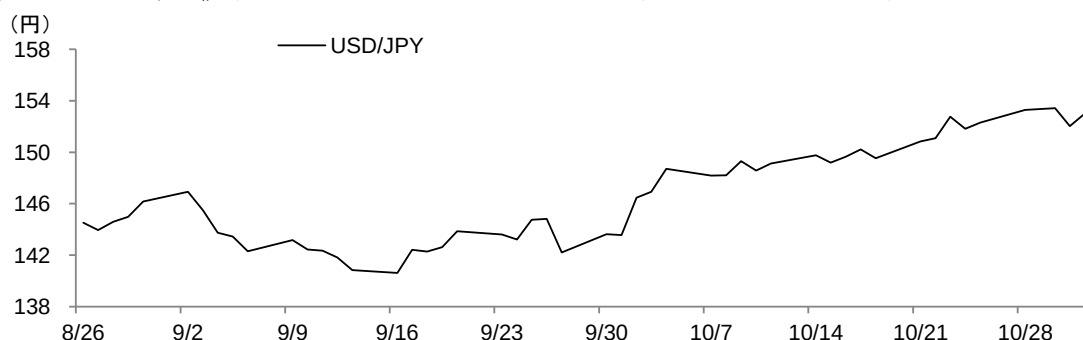
先週のドル/円は週後半にかけて上値重く推移。週初28日、152.96円でオープンしたドル/円は週末の本邦衆議院選挙の結果を受け、政局の不透明感から円売りが加速。一時、7月31日以来の高値となる153.88円まで急伸。海外時間は、米金利の動きにつられ、下に往って来いの展開。29日、ドル/円は東京時間においてドル売り圧力が強く153円を割り込む展開。海外時間は、米金利上昇を受け週高値付近に上伸も、その後は強弱入り混じる米経済指標の結果に上下に振られる展開。結局堅調な米国債入札を受けた米金利低下を背景に153円台前半で引けた。30日、ドル/円は材料難の中、153円台前半で小動き。米10月ADP雇用統計の予想を大幅に上回る結果を好感し一時153円台半ばに反発もその後は上値重く推移。31日、日銀金融政策決定会合は予想通りの金利据置きを決定。展望レポートの内容や植田日銀総裁会見がややタカ派的と解釈され円買い優勢となり153円を割り込む展開。海外時間は、堅調な米経済指標を受け一時的に153円に乗せたが、米金利が上昇幅を縮小する中、一時151.円台に反落。11月1日、発表された米10月雇用統計では非農業部門雇用者数変化が予想を大幅に下回り一旦は米金利低下を受けて、一時週安値との151.80円まで下落。ただ、売り一巡後は発表前の水準以上に金利が戻す動きとなり153円ちょうどで越週。

今週のドル/円は底固い展開を予想。米国にて大統領選挙、FOMCと重要イベントが続く。大統領選挙についてはトランプ氏、ハリス氏の対決となり、どちらが勝利してもおかしくない状況。足許、世論調査を中心にトランプ氏優勢が伝わる中、トランプトレードから米長期金利・米株・ドル高で推移。週末に一部世論調査等でハリス氏の当選確率が上昇したと伝わると、ドル売りの優勢となったが、本選を前に決定打とはならず、ドル売りの流れは続かなかった。もっとも、トランプ氏、ハリス氏のどちらも基本は財政拡張的な政策であり、大統領戦後は大統領ラリーも相まって、期待から米長期金利・米株・ドル高となると予想。ハリス氏が当選した際はトランプトレードの巻き戻しで一時的に反応すると見られるが、大局的なトレンドを変えるほどのインパクトはないと見る。また今回のFOMCのメインシナリオは▲25bpの利下げで米大統領選後でもあり、サプライズは無いと考える。基本はデータ次第と従来のスタンスを踏襲して来るだろう。今週の注目経済指標は5日(火)米9月貿易収支、米10月ISM非製造業景気指数、6日(水)米10月サービス業PMIなどが予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き:

安値 151.80 円 高値 153.88 円 終値 153.00 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 1.0750 ~ 1.1000 162.00 ~ 168.00 円

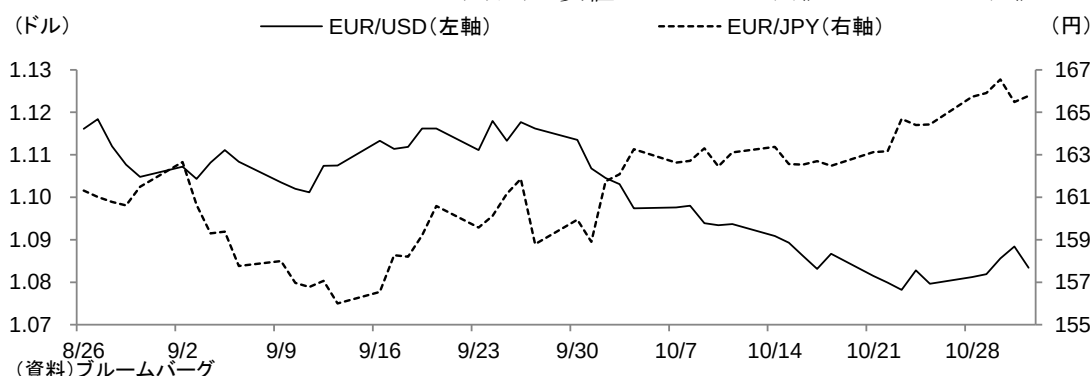
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは独金利の反発を受け上昇した。週初28日、1.0797でオープンしたユーロ/ドルは下落してスタートも、米金利が下げに転じたことに支えられ1.08台前半に反発。29日、ユーロ/ドルは米金利上昇に押され一時週安値となる1.0769まで値を下げた後、米9月JOLT求人の結果を受けた米金利低下に1.08台前半に値を戻し下に向って来いとなった。30日、ユーロ/ドルはユーロ圏7~9月期GDP(速報)など欧州経済指標の良好な結果を受け1.08台後半へ上昇。その後、複数の米経済指標の強めな結果を嫌気し一時1.08台前半まで軟化するも、独10月消費者物価指数(CPI、速報)の強い結果を受けた独金利上昇を好感し、1.08台後半を回復した。31日、ユーロ/ドルはユーロ圏10月消費者物価指数(HICP、速報)が市場予想を上回ったことを受けユーロ買い優勢となり1.08台後半まで上昇。1日、米10月雇用統計では非農業部門雇用者数が市場予想を下回ったことを受け週高値の1.0905まで上伸する場面もあったが、ハリケーンや、一部のストライキが今月の結果に影響し一時的なものとの見方にドルが買い戻され小反落すると1.0833で越週した。

今週のユーロ/ドルは米大統領選やFOMCなど米国由来の材料に左右される展開がメインシナリオとなる。米大統領選は拮抗しており、最終的な結果が確定するには時間がかかることが予想されている為、その間は報道に一喜一憂するだろう。仮にトランプ氏が返り咲き、上下院ともに共和党になる場合には一段の米金利上昇にドル高が予想されている。もっとも、10月のドル高は米経済の堅調さに大幅利下げ観測が後退したことに加えて、トランプ氏就任を見込んだトレードも含まれていた。そのため、初動はドル買いで反応するだろうが、その後は利益確定の売りも想定され上下値幅が出やすくなるだろう。7日(木)に公表されるFOMCでは▲25bp利下げがコンセンサス。先週末発表された米10月雇用統計では非農業部門雇用者数が2020年以来の低水準を記録し、前月分の結果も下方修正されたものの、少なくとも10月のデータはハリケーンやストライキの影響を受けており予め弱い結果となることは想定内だった。そのため、今会合においては前会合と異なり▲25bp利下げを実施、今後の利下げパスはデータ次第との姿勢を崩さないことが想定され値幅も限定的となりうる。とはいえ、堅調な米個人消費などを背景にタカ派姿勢を強調する場合にはユーロの上値を抑えよう。今週は6日(水)にユーロ圏9月生産者物価指数(PPI)、7日(木)にユーロ圏9月小売売上高の公表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.0769 高値 1.0905 終値 1.0833
(対円) 安値 164.79 高値 166.65 終値 165.63



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3150 194.00 ~ 200.00 円

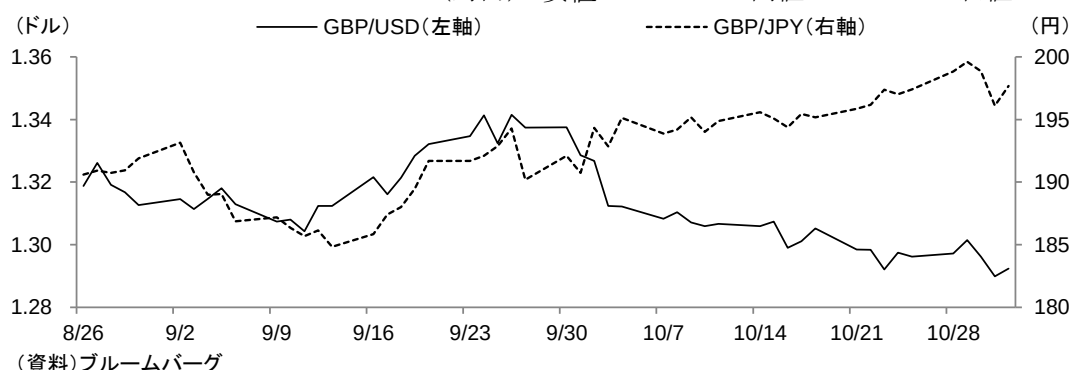
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上値の重い展開。週初28日に1.29台半ばで取引開始。29日に米9月JOLT求人数が予想を下回るとドルが売られポンドは1.30台へ上昇。30日は英予算案を待つ間、米10月ADP雇用統計が予想を上回りドルが買われポンドは1.29台半ばへ下落。その後は英予算案への反応でポンドは英国債につれて乱高下。リーズ英財務相は慎重な発表を心掛けていたとみられ、予算案発表直後こそ英国債はそれを好感してか買われたが、程なく売りに押されると翌31日も英国債は売られる。英ポンドもそれにつれて1.28台半ばまで下落した。英国債が下げ止まった11月1日の英ポンドは、米10月非農業部門雇用者数が市場予想を大きく下回る中、ドルが売られ1.29台半ばまで買い戻され週末となった。対円では、上下に振れた。週末の日本の衆議院選挙の結果を受けた円安で198円台後半で始まるが、米長期金利が低下すると程なく下落。しかし29日の米9月JOLT求人数発表後の英ポンド買いにつれて199円台へ。英予算案発表後は英ポンドの動きに連れて上下し、日本当局の牽制発言による円高も相まって31日には196円台に押される。11月1日の英ポンド買い戻しに引っ張られて198円台まで戻し週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、上値重いながらもひとまずの下げ止まりを予想。最大の焦点は7日(木)の英中銀政策決定会合とFOMC。いずれも市場予想は▲0.25bp利下げで、スワップ市場の利下げ織り込みも約8割といったところ。利下げ自体はほぼ織り込まれており、特に英中銀では利下げ票の割れ方が注目となる。先月にベイリーBOE総裁が物価次第で利下げを加速させる可能性に言及したが、その後に他の委員が利下げに慎重な発言をしていることもあり、今後の英利下げを占う上で判断材料となろう。年内の英利下げは既に1回と見込まれており、どちらかというハト派化サプライズによる下方リスクとなるが、現時点では想定していない。一方でFOMCは、先週の米雇用統計が弱く発表直後は市場も動いたが、ハリケーンによる一時的な影響と整理されており、Fedの利下げ見通しを変えるものにはならないと見られる。英ポンドの上方リスクとしては5日(火)の米大統領選か。トランプ氏の当選を見据えドルを買い持ちする取引が流行っていたこともあり、同氏が敗北する場合、ないしは捻じれとなる場合、さらには勝利の場合も材料出尽くし感から、その巻き戻しにより英ポンドが上昇する可能性に留意。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.2845 高値 1.3043 終値 1.2921
(対円) 安値 195.38 高値 199.81 終値 197.68



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 上遠野 暁大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6650 99.00 ~ 102.50 円

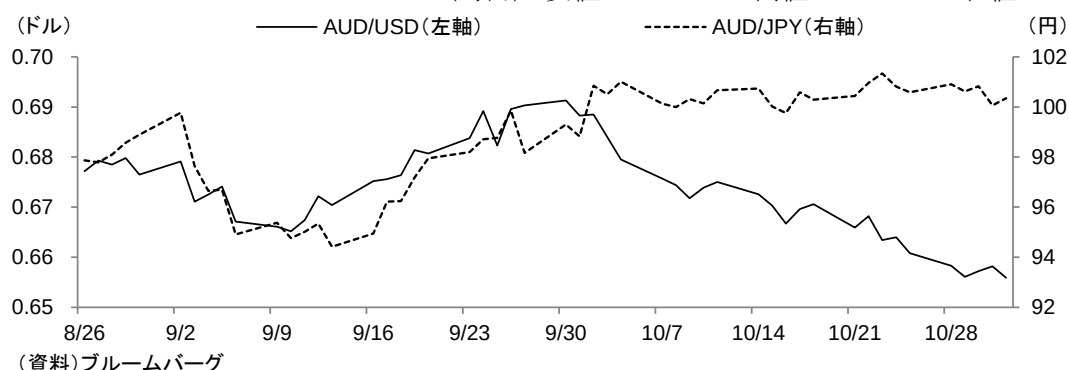
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは米金利の高止まりを背景に下落する展開。週初28日、豪ドルは週高値となる0.6603でオープンし、米金利上昇を背景に対ドルで売り優勢となり0.6580まで下落。29日の豪ドルは0.6583でオープンし、序盤から豪国債利回りが低下する流れや米国経済指標の堅調な結果を受け一時0.6545まで下落した。30日の豪ドルは0.6559でオープン。注目された豪7～9月期CPIの結果を受け豪ドルは一時週安値0.6537まで下落するもロンドン時間には0.6580台まで反発。その後発表された米10月ADP雇用統計は予想を上回る堅調な結果となった一方、米7～9月期GDP速報値は予想を小幅に下回る結果に豪ドルは0.6595まで上昇し、その後小幅に売り戻されて引けた。31日の豪ドルは0.6573でオープン。豪9月住宅建設許可件数は前月比+4.4%と予想を大幅に上回る結果となったが、豪9月小売売上高は前月比+0.1%と予想の+0.3%を下回り反応は限定的。米9月コアPCE価格指数は前年比+2.7%と予想を上回り4月以来の大幅上昇となったことを受け、ドル買いで反応すると豪ドルは一時0.6540まで下落し、小反発して引けた。11月1日の豪ドルは0.6577でオープンし0.65台後半でもみ合い。米10月雇用統計はNFPが市場予想を下回る結果となり前月分も下方修正されたことを受けて、発表直後はドル売り優勢となり、豪ドルは0.6590近辺まで上昇。その後、ハリケーンやストライキによる一時的要因との見方が強まり、豪ドルは徐々に売り戻され0.6560で引けた。

今週は5日(火)RBA理事会、米10月ISM非製造業指数、米国大統領選挙、7日(木)豪9月貿易収支、FOMC、8日(金)ジョーンスRBA副総裁講演、米11月ミシガン大消費者マインドの発表など重要イベントを多く控える。先週公表された豪7～9月期CPIは総合指数で前年比+2.8%と前回(+3.8%)から低下したものの、電気料金など政府補助金による下げが主因であり、トリム平均値が概ね市場予想並みとさほど低下していないこともあり、来年前半でのRBAの利下げを見込む市場予想に大きな変化は見られない。RBAもすぐに動く必要がないとして今会合での政策据え置きがメインシナリオとなる中で、声明文やスタンスの変化を見極めたい。また、今週は米国が大統領選とFOMCという2大イベントを予定しておりドル主導の相場となる。支持が拮抗する状況に開票にはかなり神経質な展開が見込まれるも基本的には期待先行のドル買い優勢か。また、今会合でも追加▲25bp利下げが確実視されるFOMCにおいて、堅調な消費動向を受け今後の利下げスキップの可能性示唆の行方なども見つつ、基本的にドル高による豪ドルの重い値動きをみておきたいところ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/28～11/1)の値動き: (対ドル) 安値 0.6537 高値 0.6625 終値 0.6560
(対円) 安値 99.54 高値 101.53 終値 100.35



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。